
サイコでよろしく！

あらい三水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイコでよろしく！

【Nコード】

N6040Z

【作者名】

あらい三水

【あらすじ】

他人の心が読める。ある日その力に目覚めた渡良瀬岬は、超能力者として覚醒する。岬はその力を駆使しうまく立ち回るも、それはいつしか彼自身を苦しめるものとなる。基本コメディですが、ところどころシリアス展開があります。タイトルは暫定です。

第一話

「渡良瀬岬わたらせみ！ ここまでよ、観念しなさい！」

『絶対今日という今日は逃がさない！』

高校生にもなつてホウキを勇者の剣よろしく振りかざし大声を上げながら獲物を追い回す女子も珍しい。

教室を抜け出そうとしたところを目ざとく発見され、放課後の廊下を駆けずり回ること数分。

校舎の三階、屋上へと続く階段脇のよくわからないスペースによくわからないまま追い詰められた俺は、ぜえぜえと荒い息を吐く赤い顔に視界をふさがれた。

あたりに人気はない。

「フルネームで呼ぶと誤解されるからやめたほうがいいぞ」

「何をどう誤解すんのよ！」

「あいつらデキてんじゃねえのかみたいな」

「どつとつたらそうなのよ……、バカじゃないの!?!」

「芦名由岐あしなゆき！ 俺と付き合ってくれ！」

「な……え、ええっ!?! っ、いきなりそんな……」

「みたいな感じだね」

ホウキでケツをシバかれる。きっと今しかできない貴重な経験。

これもやがて青春のページとして古きよき思い出になるのだろう。

……うわ、イテっ！ 痛い！ テイクバック大きすぎ！ つーかマジ痛いつて！

「ご自慢のポニーテイルを振り乱し振り回し、ホウキをフルスイング。バシ、バシ、と容赦なく叩きつける。

まったくこの暴れ馬め。しつげが、いや調教がなつてない。馬肉

として生涯を閉じることになっても知らんぞ。

「そうやってまた人のことバカにして！ あんまりふざけるんじゃないわよ!？」

『ちよつとドキつとしたけど……』

「それで返事は？ 答えははいかイエスで」

「はいはい、うるさいうるさい！」

『何なのコイツ……、まさか本気？』

「やっべ、二回もオツケーされてしまった。これはかつてない大勝利」

「うるさいって言ったのが聞こえなかったの？」

『なわけない。毎っ回こんな調子だし』

うーん、なんていうか、困ったな。

今日の俺は絶対調だ。あれだけ追いかけて走り回ったのに息一つ切らしていない。

それに……、さっきからめちやくちや聞こえる。

聞きたくもない、心の声。

クラス委員長がまじめで勉強ができてやさしく温厚で黒髪ロングでメガネをかけていて巨乳なんていうのは幻想だ。

というか俺の願望だ。いや、俺以外にもきつと同志はいるはず。

しかし一つもこの条件に引つかからない人間が委員長になつてしまふということも多々ある。

それはまだクラスメイトの人となりがよくわからないうちに強要される委員長選抜投票に一因があると俺は踏んでいる。

数少ない判断材料である自己紹介。それに成功したものの。失敗したものの。失笑を買ったものの。入学初日から死にたくなったものの。

さらにいうなら女子の男子化、男子の女子化。

今の若者が無意識下に求めているのは刺激。強烈なエネルギー！。

遅しいリーダーシップ。

強気な女の子に支配され、なじられ、踏みつけられたいという願望。

つまり芦名に投票した男子は全員DMだという結論に達する。言っておくが俺は投票には参加していないからな。いわば不戦敗だ。

でもまあいい。それはいい。今さら芦名がクラス委員長であることを否定する気はないさ。

だけどクラスの平和をつかさどるはずのその人が、いたいけな男子に向かいこうして実行使に出るのはいかなものかと。

「だいたいひどいじゃないか。さんざん追い回してこの仕打ち。俺がいつたい何をしたというんだ」

「掃除当番！」

「は大変だよね」

「あんたが！ 今週！」

「そんな、今日は水曜のはずだぞ。昨日もおととも掃除をした記憶がない。これはいつたい……？」

「それはあんたがバツクれてるからでしょうが！」

「そうか、掃除当番だったのか……。それで……。」

「まいったな、みんなに迷惑をかけてしまったかもしれない。決まりも守れないロクでもないやつと思われたかもしれない。」

「まあ知ってたけど。」

「芦名が本来の用途と違う使い方をしたホウキをぐいっと押し付けてくる。」

「俺は受け取ったら負けだといわんばかりに、」

「……俺、掃除すごく苦手なんだ。ホント、これだけは」

「なに深刻そうな顔してんのよ！ 単純に掃除したくないだけだよ！」

『気味悪いぐらいにコロコロ態度が変わるわねコイツ……』

「あれは忘れもしない中学時代。熱を出して学校を休んだ次の日、登校すると俺のイスは机の上に逆さまに乗せられてたんだ。掃除の時に上げたままだったんだ。シヨックだった。いくら一番後ろの席だったとはいえ……。それ以来俺は掃除が大嫌いになった」

「くっだらない！ 全然関係ないじゃないの！ あたしなんかね、小学生の時給食残しちゃダメって言われて、どうしても食べられないものがあったて掃除の時間になるまで食べさせられた事あるんだから！ もうずっと半泣きだったわ！」

「うわ、ださっ」

「なによ、なんか文句ある！？」

『本っ当につらかったんだから！』

「いや、文句なんてない。むしろ好感度アップだ。案外かわいいところあるじゃん」

「えっ？」

『か、かわいい？ ただの恥ずかしい話なのに……？』

「かわいさアピールのための嘘である事を除けば」

「嘘じゃないわよ！ なんでそんな嘘つかなきゃならないのよ！」

『元はといえばコイツがおかしな話するからあたしもつい……』

芦名はかみつくように声を荒げた。活発そうな瞳がどんな屁理屈もつっぱねてやると言わんばかりにららんと輝いている。

でもそんなに怒ってないな。なんとなくわかる、それどころか…

…。

だけど俺は。

……ああ、イライラする。鬱陶しい。不快だ。

体はすこぶる好調なのに、気分は最悪。

彼女の口から発せられた表の言葉が耳に入るたびに、脳に直接突き刺さるような裏の言葉。思考の矢。

それがひどく俺の精神を傷つける。的確に急所をえぐる。うるさい。しゃべるな。もうやめろ。

俺に話しかけるな。俺に声を発するな。俺に意識を向けるな。

「……ねえ、どうしたの？ 渡良瀬？」

『なんか急に様子が変わね……？』

いつの間にかうなだれていた俺の顔を覗き込むように芦名が声をかけてくる。

「……キンキンうるせえな……」

「……え？」

「……今すぐ消えてくれ、俺の前から……」

「な、なによ急に……」

「いいから早く消えろ！」

芦名は消えると言われてすぐその通りにするような人間ではない。かといって豹変した俺の態度に動揺を隠せない様子。

その時俺の全身を支配する言い表せない苛立ちが、衝動的に腕を伸ばし彼女の胸倉を掴んだ。

一番上まで止められたブラウスのボタンが二つ三つ弾け飛び、白い胸元がわずかにあらわになる。

「うっ、ち、ちょ、……く、苦しい」

『何！？ 何なのいきなり……？』

彼女の足が地を離れる。

胸元を掴んだ右腕は、造作もなく女子生徒一人を宙に持ち上げた。

着衣の乱れが彼女のへそのあたりまでを外気にさらす。

「や、めて……離し……て」

『どうして？　なんで？　こんな……』

どうして？　わからない、俺だって聞きたい。

なんで？　何故だろう。苦しいから？　俺だって苦しい。

ドクつと心臓が大きく跳ねる。俺はまたも無意識に、投げ出すように芦名を解放した。

どさつと廊下に倒れこみ、咳き込みながら荒い呼吸を繰り返す。

俺はその姿をどこか冷めた目で見ていた。

衣服がはだけ、まるで暴漢にでも襲われたような彼女を置いて俺はその場から逃げ出した。

体は、綿のように軽い。だが地を蹴る足は、力強い。人のいない階段を一足飛びに飛び降りる。

そして放課後を迎えて帰宅する生徒の群れに紛れた。

まだ少し朦朧とする意識の中、帰り道を歩きながら俺はこんな事を思った。

そうか、首を絞めれば声は出せないのか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6040z/>

サイコでよろしく！

2011年12月20日02時52分発行